

社会学研究科

I 2019年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2019年度大学評価結果総評】（参考）

社会学研究科は、大学院入試受験者、進学者が少ない中、大学院教育の水準を維持し、博士号の取得、査読付き雑誌への論文掲載など、着実に教育実績を上げていることは大いに評価できる。また、アカデミックな研究指導と、社会における実践的な調査のための知見の提供の両面にわたって、教員組織をあげて体系的な指導を展開していることも評価できる。修士論文、博士論文の作成についても、わかりやすいロードマップと綿密な集団的指導を展開しており、教育機関としては高い機能を発揮している。今後大学院教育を活性化させるためには、大学院修了後の進路について、社会学という学問の特性を生かして、具体的なイメージを学生に持たせることが必要であり、そのための工夫を期待したい。また、そのような取り組みを通して、学部と大学院をつないだ新たな教育体系を構築していきけるのではないかと期待している。グローバル化、社会貢献について、大学院生が少ない中では積極的な展開を図りにくいという事情もあると思われるが、留学生の受け入れ、社会に対する情報発信についてもさらなる努力を期待したい。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

博士後期課程において、院生の書いた論文の学術雑誌への掲載、博士号の取得は順調に進んでいる。体系的なコースワークに加え、「総合演習」などの集団指導体制を整備することを通じて、教員組織をあげて院生の論文作成・学位取得を支援している。今後も、コースワークや複数の教員による研究指導の確実な実施に努めていく。

修士課程入学者は昨年度より大幅に増加した。入学者のうち過半数は留学生であり、院生のグローバル化も進展した。学内の大学院進学者が受験しやすいようにと2018年度に7月から10月に移した学内入試においても、受験者、入学者ともに増加した。学内進学制度については、効果的な広報のあり方を引き続き検討する予定である。社会貢献については、2019年度に「公開シンポジウム」を実施し、社会学研究科での教育・研究の成果について、社会への情報発信が行われた。

【2019年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

社会学研究科では、グローバル化の進展にも呼応した留学生の受け入れ努力が実り、また、これまで充実を図ってきた学内進学制度の周知によって学内入試の受験者数、合格者数が増加し、結果として修士課程入学者が昨年度より大幅に増加したことは評価できる。昨年度「公開シンポジウム」を社会学部学会と共催で実施し、意義ある議論ができたことにより社会学研究科での教育・研究の成果について、社会への情報発信が行われ、社会貢献への道が開かれたことも評価できる。今後これを単年度で終わらせることなく継続的な取り組みとするための工夫を期待したい。英語による研究成果の公表のための「社会学研究1」の継続的な担当体制を確立したことは高く評価することができるので、履修者について、英文論文の執筆、国際学会での報告等を積極的にを行うことを促すなどの一層の取組みが期待される。

II 自己点検・評価

1 教育課程・学習成果

【2020年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

①修士課程においてコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせ、教育を行っていますか。

S A B

※コースワーク、リサーチワークを組み合わせた教育課程の概要を記入。

理論系科目、領域別科目、および社会調査・データ分析などの方法論に照準化した科目からなるコースごとの学習体系と並行して、各学生の修士論文執筆に向けた研究活動を支援し、指導していくための「総合演習」を設置している。

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・法政大学大学院学則第10条、第22条、別表I。
- ・「大学院要項」、修士課程の修了要件。

※注1 回答欄「はいいいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<p>・「大学院講義概要（シラバス）」</p>	
②博士後期課程において授業科目を単位化し、修了要件としていますか。	はい <input type="checkbox"/> いいえ <input type="checkbox"/>
<p>【根拠資料】 ※「はい」を選択した場合に単位化及び修了要件として設定されていることが確認できる資料を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・法政大学大学院学則第 10 条、第 26 条、別表Ⅱ。 ・「大学院要項」、博士後期課程の修了要件。 ・「大学院講義概要（シラバス）」 	
③博士後期課程においてコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせ、教育を行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
<p>※コースワーク、リサーチワークを組み合わせさせた教育課程の概要を記入。</p> <p>リサーチワークとしての論文指導をカリキュラムの柱として位置づけ、また、博士論文作成に至る里程碑を明確にして、これを学生には提示している。</p> <p>また、査読付き学会誌への論文投稿の訓練の場として「社会学総合演習 A」を設け、社会学研究科の教員による「模擬査読」を行い、学生の学術論文執筆のスキルの向上を図っている。博士論文の構想とその進捗状況を報告する場として「社会学総合演習 B」を設け、博士論文完成に向けた指導を複数の教員で行っている。</p>	
<p>【2019 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。特になし。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「博士論文までの里程碑」 ・法政大学大学院学則第 10 条、第 26 条、別表Ⅱ。 ・「大学院要項」、博士後期課程の修了要件。 ・「大学院講義概要（シラバス）」 	
④専門分野の高度化に対応した教育内容を提供していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
<p>※学生に提供されている専門分野の高度化に対応した教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。</p> <p>【修士】</p> <p>社会学コース、メディアコースのいずれにおいても、各領域の第一線に立つ研究者、実務経験者によって大学院教育にふさわしい内容の教育が行われている。また、優れた研究者を毎年の集中授業形式で学外から招聘する科目「社会学特殊研究 5」、「社会学特殊研究 6」を設置している。「専門社会調査士」の資格取得のためのプログラムも学内に準備し、研究者として必要な技能の習得も可能になっている。メディアコースには実践的科目として「取材文章実習」、「調査報道実習」の科目が設けられている。</p> <p>【博士】</p> <p>社会学における各領域の第一線に立つ研究者によって大学院博士課程にふさわしい内容の教育が行われている。社会学の基本的著作を精読し、その分析枠組みや方法論について深く学ぶ「原典講読」の授業が置かれている一方で、査読付き論文の執筆の仕方を学ぶ「社会学総合演習 A」や英語論文の執筆のコツを学ぶ「社会学研究 1」など、研究者のキャリア形成に不可欠な実践的なスキルを習得するための授業も置かれている。また、博士論文の構想およびその進捗について複数の教員が参加しコメントする「社会学総合演習 B」を設置し、博士論文執筆に向けた指導を行なっている。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・法政大学大学院学則別表Ⅰ、Ⅱ。 ・「大学院講義概要（シラバス）」 	
⑤大学院教育のグローバル化推進のための取り組みをしていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A <input type="checkbox"/> B <input type="checkbox"/>
<p>※大学院教育のグローバル化推進のために行っている取り組みの概要を記入。</p> <p>【修士】</p> <p>修士課程の留学生の授業での報告や修論執筆に関して、ピアサポートとしてのチューター制度の効果的な運用により、博士後期課程の院生による研究指導の支援を図っている。</p> <p>【博士】</p> <p>英語で学術論文を執筆し、出版するまでに必要な事項を学ぶ科目「社会学研究 I (Academic English Writing Skills for the Social Sciences)」が設けられている。担当教員の退職により 2018 年度はこの授業を休講せざるを得なかったが、2019 年度に社会学部の英語教員が「社会学研究 I」を継続的に開講する体制が確立され、2020 年度も開講されている。</p>	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>今後、社会学部の英語教員による兼担というかたちで「社会学研究Ⅰ」を継続的に開講できる体制をつくる目処がたった。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・法政大学大学院学則別表Ⅱ。 ・「大学院講義概要（シラバス）」 	
<p>1.2 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。</p>	
<p>①学生の履修指導を適切に行っていますか。</p>	<p>S <input checked="" type="checkbox"/> A B</p>
<p>※履修指導の体制および方法を記入。</p> <p>【修士】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科目の履修や修論に関して、各学生の指導教員による指導に加えて、教授会執行部、教務委員が適宜相談に応じる形で行っている。 ・指導教員による個別の指導に加え、修士課程では必修科目である基礎演習などにおいて研究経過の報告を求め、複数教員のアドバイスが可能になるように工夫している。 <p>【博士】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科目の履修や博士論文の執筆などに関する指導は、各学生の指導教員による指導に加えて、教授会執行部、教務委員が適宜相談に応じる形で行っている。 ・指導教員による個別の指導に加え、博士課程では必修科目である「社会学総合演習B」などにおいて研究経過の報告を求め、複数教員のアドバイスが可能になるように工夫している。 	
<p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特になし 	
<p>②研究科（専攻）として研究指導計画を書面で作成し、あらかじめ学生が知ることのできる状態にしていますか。</p>	<p><input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ</p>
<p>※ここでいう「研究指導計画」とは、事務手続きのスケジュールやシラバス等の個別教員の指導計画を指すのではなく、研究科としての研究指導体制及び研究指導スケジュールをまとめたものを指します（学位取得までのロードマップの明示等）。また、「あらかじめ学生が知ることの状態」とは、HPや要項への掲載、ガイダンスでの配布等が考えられます。</p> <p>【修士】</p> <p>4月初めのオリエンテーションにおいて、修士課程の学生に向けた「修士論文提出までのタイムスケジュール」を配布するとともに、そのプロセスを口頭で説明している。</p> <p>【博士】</p> <p>4月初めのオリエンテーションにおいて、博士後期課程の学生に向けた「博士論文までの里程碑」を配布するとともに、そのプロセスを口頭で説明している。</p>	
<p>【根拠資料】 ※研究指導計画が掲載された文書・冊子等の名称を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学院講義概要（シラバス）。 ・「修士論文提出までのタイムスケジュール」。 ・「博士論文までの里程碑」 	
<p>③研究指導計画に基づく研究指導、学位論文指導を行っていますか。</p>	<p><input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ</p>
<p>※組織的な研究指導、学位論文指導の概要を記入。</p> <p>【修士】</p> <p>修士課程についてはそれぞれのコースで「総合演習」を実施し、計4回修論に向けた研究経過の報告を求め、これに応じて研究経過・計画についての指導を行っている。4回の「総合演習」は各コースの必修単位である「基礎演習」の一環として行われるものとして学生に義務づけられている。</p> <p>【博士】</p> <p>博士後期課程では、「社会学総合演習A」において、査読付き学術雑誌への投稿論文の執筆指導を行った。また、「社会学総合演習B」では、博士論文執筆に向けての研究計画と経過の報告にたいして、複数教員による指導を行った。これらの科目は最短修了までの6セメスターに配置された「博士論文指導」とともに修了要件科目とされている。</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・法政大学大学院学則第 10 条、第 26 条、別表Ⅱ。 ・「大学院要項」、博士後期課程の修了要件。 ・「大学院講義概要（シラバス）」 ・第 1 回総合演習（社会学コース，メディアコース），第 2 回総合演習（社会学コース，メディアコース），第 3 回総合演習（社会学コース，メディアコース），第 4 回総合演習（社会学コース，メディアコース）のスケジュール ・「社会学総合演習 A」「社会学総合演習 B」のスケジュール 	
1.3 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	
①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
※成績評価と単位認定の確認体制及び方法を記入。	
<p>【修士】 基本的には、各科目の担当教員に対する相互信頼を尊重している。</p>	
<p>【博士】 基本的には、各科目の担当教員に対する相互信頼を尊重している。</p>	
<p>【2019 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし</p>	
②学位論文審査基準を明らかにし、あらかじめ学生が知ることのできる状態にしていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
※学位論文審査基準の名称及び明示方法を記入。	
<p>【修士】 2011 年度に定め、2017 年度に改定した学位論文の審査基準を学生全員に周知している。</p>	
<p>【博士】 2011 年度に定め、2017 年度に改定した学位論文の審査基準を学生全員に周知している。</p>	
<p>【根拠資料】 ※学位論文審査基準にあたる文書の名称を記入。また、冊子等に掲載し公表している場合にはその名称を記入。 ・法政大学大学院社会学研究科学位論文審査基準</p>	
③学位授与状況（学位授与者数・学位授与率・学位取得までの年限等）を把握していますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
※箇条書きで記入※データの把握主体・把握方法、データの種類等を記入。	
最近約 15 年間について学位授与者数を一覧にして状況を把握している。	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・博士学位取得状況（2003-2019）。</p>	
④学位の水準を保つための取り組みを行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
※取り組み概要を記入。	
<p>【修士】 修士論文判定の教授会後、教授会懇談会を開催し、教育課程の見直しと同時に、提出、評価された修士論文の内容、水準を含めた修士学位授与の適切性の検討を行っている。</p>	
<p>【博士】 判定の教授会の他に教授会懇談会を開催し、教育課程の見直しと同時に、提出、評価された博士論文の内容、水準を含めた博士学位授与の適切性の検討を行っている。</p>	
<p>【2019 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・2019 年度教授会懇談会メモ（2020 年 2 月 1 日） ・法政大学学位規則 ・「社会学研究科博士学位申請論文受理小委員会および、審査小委員会の内規」</p>	
⑤学位授与に係る責任体制及び手続を明らかにし、適切な学位の授与が行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

※責任体制及び手続等の概要を記入。ただし、博士については、学位規則のとおりに行われている場合には概要の記入は不要とし、「学位規則のとおり」と記入。

【修士】

修士課程においては、指導教員による論文指導を中心にしつつ、4セメスターをつうじて4回の総合演習での発表を修士論文の提出要件とすることで、他の教員による研究上の助言を確実に受けられる機会を設けている。

修士論文の審査は、指導教員を主査とし、修士論文の予備登録の段階で副査を選任して、2名の教員によって提出された修士論文の審査と口述試験を行っている。それらの結果を修士論文判定教授会に報告し、併せて提出された修士論文を回覧し、修士論文の可否、評価を研究科教授会の合議によって決定する。

【博士】

学位規則のとおり。

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・「大学院要項」

⑥学生の就職・進学状況を研究科（専攻）単位で把握していますか。

はい いいえ

※データの把握主体・把握方法、データの種類等を記入。

2019年度修士課程修了生の進路について、就職、進学、帰国等のアンケートを実施した。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・2019年度社会学研究科修了者進路調査票の回収済み個票。

1.4 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

①分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。

S A B

※取り組みの概要を記入。

【修士】

学位論文審査にあたり、提出された論文の分野の特性に応じた学習成果を測定するにふさわしい審査委員を選び、論文の審査に当たっている。

【博士】

学位論文審査にあたり、提出された論文の分野の特性に応じた学習成果を測定するにふさわしい受理小委員会および審査小委員会のメンバーを選び、論文の審査に当たっている。

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

②具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。

S A B

※取り組みの概要を記入。取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学習成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等。

【修士】

大学院における学習成果は、個別科目での成績評価以上に、修士論文において問われるものと考えている。2019年度には6件の修士学位を授与した。

【博士】

大学院における学習成果は、個別科目での成績評価以上に、博士論文において問われるものと考えている。2019年度には、1件の博士学位を授与した。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

・2018年度第14回教授会議事録（2019年2月1日開催）
・学位論文審査報告（2020年2月25日）

1.5 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程及びその内容、方法の改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。	S A B
<p>※検証体制および方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。</p> <p>【修士】 教育成果がもっとも明確に問われるのは修士論文の審査時点であり、提出された論文の評価と同時に、その教育のプロセスの適切性について意見交換がなされている。</p> <p>【博士】 教育成果がもっとも明確に問われるのは博士論文の審査時点であり、提出された論文の評価と同時に、その教育のプロセスの適切性について意見交換がなされている。 こうした従来からの本研究科の基本的見解を堅持しつつ、博士後期課程在籍者を対象に、冊子体、およびウェブ上で公表を前提にして2016年度から作成を始めた「社会学研究科社会学専攻 博士後期課程 研究業績目録」を2019年度も作成した。学習成果の定期的な検証、教育課程及びその内容、方法の改善・向上につなげていく取り組みとして、このようなかたちでの院生の研究業績の定期的な把握を今後も進める。</p> <p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・2019年度版「法政大学大学院社会学研究科社会学専攻 博士後期課程 研究業績目録」</p>	
②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	S A B
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <p>履修者が5名以下の授業が多いためにアンケートは行っていないが、院生との話し合いの機会である主任会見を年1回実施し、学生からのさまざまな要望をよりきめ細かに聞く機会を設けている。さらに、この主任会見の要望書には十分に反映されていない教育研究上の課題を検証するために2016年度に設けた「院生との懇談会」を2019年度もおこない、教育課程及びその内容、方法の適切性についてより広範に点検・評価を行うとともに、教授会での共有を図った。</p> <p>【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・2019年度専攻主任会見要望・提案書に対する回答書（2019年12月10日） ・2019年度社会学研究科院生との懇談会（2020年1月21日開催）議事録</p>	

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
<ul style="list-style-type: none"> ・「社会学研究 I」を社会学部英語教員による兼担という形で継続的に開講する体制が確立されたこと。 ・「社会学総合演習 A」で模擬査読と合評を行い、査読付き学術誌への論文投稿の支援を行なっていること。 ・博士後期課程在籍者の研究業績目録を作成したこと。 ・社会学研究科院生との懇談会を開催したこと（2020年1月21日） 	

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

社会学研究科修士課程においては、体系的コースワークが設計され、論文執筆から学位取得に向けたロードマップが明示されているなどリサーチワークとも適切に組み合わせられた教育を行っている。少人数のゼミによる密度の高い指導が行われ、修士論文判定後の教授会懇談会における教育課程の見直しと学位授与の適正性の検証などの情報交換が行われていることも評価できる。授業改善について院生との懇談の機会が設けられていたり、入学者へのサービスとしてチュータ

※注1 回答欄「はいいいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

一懇談会による情報交換が行われていることも適切である。博士後期課程においては、英語による学術論文の執筆指導科目である「社会学研究1」について社会学部の英語教員2名による1年ごとのローテーション開講の体制を確立させたことは評価できる。今後はこれを英語による研究成果発表の実績達成に向けた取り組みにつなげることが期待される。学術雑誌への投稿を促すため「社会学総合演習A」で模擬査読を実施して院生の積極的参加を促していることも適切である。

2 教員・教員組織

【2020年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

①研究科（専攻）独自のFD活動は適切に行われていますか。

S **A** B

【FD活動を行なうための体制】※箇条書きで記入。

- ・年1回3月修了の修士論文判定のための教授会後に懇談会を開催して、研究科における研究指導上の諸課題、制度的課題等について議論する機会を設けている。
- ・特に入学者の多様化にともない、チューター制度など新たな制度対応、オフィースアワー、シラバスの問題をはじめ、修士論文・博士論文の指導、審査基準、早期修了制度、留学生に対する指導、メディアコースの今後などを取り上げて大学院におけるFDの展開をはかっている。

【2019年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。

- ・2020年2月1日開催の教授会懇談会では、総合演習やメディアコースの運営について議論した。

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・教授会懇談会における議論の記録（2020年2月1日）

②研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。

S **A** B

※取り組みの概要を記入。

社会学研究科による社会貢献・社会連携のための試みとして、社会学部学会との共催で7月6日に市ヶ谷キャンパスにて公開シンポジウムを開催した。ここでは社会学研究科の教員および名誉教授、博士後期課程の院生および修了者でアカデミックポストに就いた者、学外の研究者を報告者・討論者として招き、「記憶と記録：東日本大震災・福島原子力発電所事故の経験を引き継ぐために」というテーマで議論を行った。

【2019年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

社会学研究科での研究活動を社会貢献・社会連携と結びつける試みとして、上記の取り組みを行ったこと。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・公開シンポジウムの趣意書
- ・公開シンポジウムのポスター

(2) 長所・特色

内容	点検・評価項目
・社会貢献・社会連携の可能性を検討し、公開シンポジウムの開催を決定したこと。	2.1②

(3) 問題点

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

社会学研究科では、年1回修士論文判定のための教授会後に懇談会を開催して、研究科における研究指導上の諸課題や制度的課題について教員同士が議論する機会が設けられていることは適切である。学部と連携した教員組織の世代交代を図る取り組みを実施しており、若手教員を研究科教授会のメンバーに加えたり、採用に関しての学部との情報共有を進め、若手教員を拡充したことは評価できる。また、社会学研究科による社会貢献のための試みとして、社会学部学会との

※注1 回答欄「はいいいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

共催で市ヶ谷キャンパスにおいて公開シンポジウムを開催したことは評価できる。今後これを単年度で終わらせることなく継続的な取り組みとするための工夫を期待したい。

III 2019 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
1	中期目標	英語による学術論文の執筆を指導する科目である「社会学研究1」をより実効的なものにしていく。	
	年度目標	英語ネイティブの担当教員による継続的な開講を可能にする。	
	達成指標	継続的な開講が可能となる体制が確立されること。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	「社会学研究1」は、社会学部の英語担当のネイティブの教員2名により1年毎のローテーションで開講する体制が確立された。
		改善策	今後もこの体制を維持しつつ、「社会学研究1」の重要性と有効性を学生に周知していくこと。
質保証委員会による点検・評価			
所見	継続的な体制が構築できたことを高く評価したい。		
改善のための提言	履修登録者を増やすように働きかけるとともに、英文論文の執筆、国際学会での報告をうながしていく。		
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】	
2	中期目標	各コースに設けられた「総合演習」を確実に運営する。	
	年度目標	「総合演習」の継続的な運営のため、教員の積極的な参加を促す。	
	達成指標	教授会や教授会懇談会をそのための意見交換の場として活用すること。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	修論審査の体制についての情報を教員間で早めに共有することで「総合演習」への教員の積極的な参加を促した。また、教授会懇談会にて意見の交換を行った。
		改善策	教員が「総合演習」に参加しやすいような体制についての意見の交換を行うこと。
質保証委員会による点検・評価			
所見	総合演習に教員が参加しやすいような体制を作るための努力がなされている。		
改善のための提言	教員の参加を増やすための努力を継続する。		
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】	
3	中期目標	院生の学術雑誌への論文投稿を促す。	
	年度目標	「社会学総合演習A」の実効性をさらに高める。	
	達成指標	「社会学総合演習A」の成果について検証すること。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	「社会学総合演習A」では「模擬査読」という形で院生の論文の検討を行い、それが学術雑誌掲載につながった例もあった。
		改善策	「社会学総合演習A」への院生の積極的な参加を促し、学術論文作成のスキルの向上に努めること。
質保証委員会による点検・評価			
所見	総合演習Aでの査読経験が投稿論文の採録につながったケースがどのくらいかを明記してはどうか。		
改善のための提言	受講者に自らのテーマに応じた論文を仕上げていくプロセスが博士論文に繋がっていることをもっと意識させる。		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

No	評価基準	学生の受け入れ	
4	中期目標	学内進学の様子の周知について再検討する。	
	年度目標	学内進学の様子のさらなる周知を行う。	
	達成指標	ポスターの掲示以外の学部学生へのアピールの方法を検討すること。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	学内入試の受験者数、合格者数が増加した。
		改善策	学内入試について、学部学生に向けた情報発信の方法についての工夫を続けること。
質保証委員会による点検・評価			
所見		学内入試時期の見直し、広報の効果が少しずつ現れている。今後も継続的にこうした取り組みを進めることが必要である。	
改善のための提言	学部教育とのよりいっそうの連携の中で、学部カリキュラムとの延長線上に、大学院が学部学生の中でみえる形にすることが望まれる。		
No	評価基準	教員・教員組織	
5	中期目標	学部と連携して教員組織の円滑な世代交代をはかる。	
	年度目標	教員採用に関して学部との情報共有を継続的に進める。	
	達成指標	大学院の教員組織の問題の所在を明らかにして、学部との連携を図ること。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	若手教員を研究科教授会のメンバーに加えた。教員採用に関して、学部との情報共有を継続している。
		改善策	大学院の教員組織の問題点について、今後も学部との連携を続けていくこと。
質保証委員会による点検・評価			
所見		若手教員が拡充されていることは評価できる。	
改善のための提言	教育負担の公平性に配慮しながら、学部と連携して適正な役割配分を考えていくこと。		
No	評価基準	学生支援	
6	中期目標	2017年度博士後期課程研究業績目録の公開を進め、院生進路開拓に役立てる。	
	年度目標	2018年の博士後期課程の研究業績目録を作成と公開によって、院生の進路開拓の努力を継続すること。	
	達成指標	2018年度研究業績目録を作成し、ウェブ上で公開すること。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	2018年度研究業績目録を作成し、ウェブ上で公開した。
		改善策	今後も博士後期課程の研究業績目録を公開し、院生の進路開拓の努力を続けること。
質保証委員会による点検・評価			
所見		業績の公開といった取り組みの効果がでてきている。就職に繋がるのが期待される。	
改善のための提言	博士課程における研究業績の累積を博士論文に結びつけていく道筋を、研究者として自立していく道筋として自覚的に構築していくことをうながす。		
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
7	中期目標	大学院教育のなかでの社会連携の可能性について検討する。	
	年度目標	社会貢献・社会連携の一環として7月に公開シンポジウムを行う。	
	達成指標	公開シンポジウムの内容を充実したものにすること。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
自己評価		S	
理由		7月6日に公開シンポジウムを社会学部学会と共に開催し、意義ある議論を行うことができた。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

	改善策	今後も継続して公開シンポジウムを行い、社会学研究科での教育・研究の成果を社会に伝えていくこと。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	シンポジウムを実現したことを高く評価したい。
	改善のための提言	単年度で終わるのではなく、継続的な取り組みとすべく、今後取り組むべきテーマ一覧を作成してはどうか。

【重点目標】

社会学研究科による社会貢献・社会連携のための試みとして、7月6日に市ヶ谷で公開シンポジウムを開催すること。ここでは社会学研究科の教員、博士後期課程の院生、学外の研究者を報告者・討論者として招き、「記憶と記録：東日本大震災・福島原子力発電所事故の経験を引き継ぐために」というテーマで議論を行う予定である。

【年度目標達成状況総括】

「社会学研究1」の継続的な担当体制を確立したこと、学内入試の受験者・合格者が増加したこと、公開シンポジウム「記憶と記録 東日本大震災・福島原子力発電所事故の経験を引き継ぐために」の開催で研究科の「社会貢献」への道を開いたことが今年度達成できた成果であった。

【2019年度目標の達成状況に関する大学評価】

2019年度目標の達成状況に関しては、社会学研究科による社会貢献のための試みとして、社会学部学会との共催で7月6日に市ヶ谷キャンパスにおいて公開シンポジウムを開催して意義ある議論を行えたことで目標が十分に達成できたと思われる。英語による研究成果の公表のための科目である「社会学研究1」の継続的な開講を可能にし、より実効あるものにしていくという目標も、教員2名による1年ごとのローテーション開講の体制を確立させることによりほぼ目標を達成することができた。

IV 2020年度中期目標・年度目標

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
1	中期目標	英語による学術論文の執筆を指導する科目である「社会学研究1」をより実効的なものにしていく。
	年度目標	「社会学研究1」の重要性と有効性を学生に周知する。
	達成指標	院生MLを活用して重要性と有効性を周知し、博士後期課程の学生の履修登録を促す。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
2	中期目標	各コースに設けられた「総合演習」を確実に運営する。
	年度目標	「総合演習」の確実な運営に向けて、教員の意見交換の場を設ける。
	達成指標	意見交換の場で行われた検討の結果を確認する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
3	中期目標	院生の学術雑誌への論文投稿を促す。
	年度目標	学術論文執筆のスキルの向上を目的として開講されている「社会学総合演習A」への積極的な参加を促す。
	達成指標	オリエンテーションや院生MLを通じて授業の趣旨を周知し、積極的な参加を促す。
No	評価基準	学生の受け入れ
4	中期目標	学内進学制度の周知について再検討する。
	年度目標	学内進学制度の効果的な広報の方法について、教員の意見交換の場を設ける。
	達成指標	意見交換の場で行われた検討の結果を確認する。
No	評価基準	教員・教員組織
5	中期目標	学部と連携して教員組織の円滑な世代交代をはかる。
	年度目標	退任した教員の充足との関連において、研究科のニーズが反映された採用を学部に働きかける。
	達成指標	後任人事に関連する研究科のニーズを学部に申し入れる。
No	評価基準	学生支援
6	中期目標	2017年度博士後期課程研究業績目録の公開を進め、院生進路開拓に役立てる。

※注1 回答欄「はいいいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

	年度目標	2019年度の研究業績目録のWeb上での公開を進める。
	達成指標	研究業績目録をWeb上にアップして広く公開する。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
7	中期目標	研究業績目録をWeb上にアップして広く公開する。
	年度目標	公開シンポジウムの継続に向けた体制整備について検討する。
	達成指標	公開シンポジウムの継続に向けた体制整備についての検討結果を確認する。
<p>【重点目標】</p> <p>昨年度、社会学研究科による社会貢献・社会連携の試みとして行った公開シンポジウムを、今後継続的に行うための体制整備について検討すること。</p> <p>【目標を達成するための施策等】</p> <p>社会学研究科による社会貢献・社会連携施策としての公開シンポジウムを継続的に実施するための体制整備について、教授会で検討する。</p>		

【2020年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

<p>社会学研究科の大学院修了者の進路拡大への取り組みとして、2017年度博士後期課程研究業績目録の公開を進めることに加え、2019年度の研究実績目録を作成してウェブ上で公開することが掲げられている。これらを確実に実施したことの評価が就職の道の開拓につながることに期待したい。教員2名による1年ごとのローテーション開講の体制を確立させた「社会学研究1」についても、より実効的な科目にしていき学生の履修登録を促すとの目標が掲げられている。将来的にはさらに履修者について外国留学制度とも結び付けた上、英文論文の執筆、国際学会での報告を促すなどの取組みが期待される。</p>
--

V 2019年度認証評価指摘事項に対する改善計画報告

No.	種別	内容
1	基準	基準1 理念・目的
	指摘区分	概評
	提言(全文)	ただし、 <u>社会学研究科</u> とデザイン工学研究科では、「人材の育成に関する目的及び教育研究上の目的」を修士課程、博士後期課程で同一としているため、 <u>課程ごとにこれを定め、公表するよう改善が望まれる。</u>
	大学評価時の状況	「法政大学大学院学則」の[別表V]において、「人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的」が修士課程、博士後期課程で同一となっており、課程ごとに定められていない。
	大学評価後の改善状況・改善計画	2020年度中の教授会において、課程ごとの「人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的」を定めた学則改正を検討し、2020年度中の学則改正を経て改善を行う予定である。
	「大学評価後の改善状況・改善計画」の根拠資料	特になし

【認証評価結果における指摘事項への対応状況に関する評価】

<p>「法政大学大学院学則」の別表Vにおいて、「人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的」が修士課程、博士後期課程で同一となっているが、この学則を改正した上で、課程ごとにこれを定め、公表するという改善策が確実に実行されることが望まれる。</p>

【大学評価総評】

<p>社会学研究科では、昨年度「公開シンポジウム」を社会学部学会と共催で実施し、意義ある議論ができたことにより社会学研究科での教育・研究の成果について、社会への情報発信が行われ、社会貢献への道が開かれたことを契機として、今後これを継続的な取り組みとするための工夫を期待したい。英語による研究成果の公表のための「社会学研究1」の継続的な担当体制を確立したことを受けて、学生の履修登録を促して履修者の増加を図ると共に、さらに履修者について英</p>
--

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

文論文の執筆、国際学会での報告等を積極的に行うことを促すなどの一層の取組みが期待される。大学院修了者の進路拡大のための取り組みとして、2019年度の研究実績目録を作成してウェブ上で公開するなどの地道な試みを継続することも期待したい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。